

## 対照研究の流れと国立国語研究所における対照研究の系譜

著者	佐々木 倫子
雑誌名	言語の対照研究
ページ	1-10
発行年	1997-12-19
シリーズ	国立国語研究所研究発表会 ; 平成9年度
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002924">http://doi.org/10.15084/00002924</a>

## 対照研究の流れと 国立国語研究所における対照研究の系譜

日本語教育センター第二研究室  
佐々木 倫子

### 1. 「対照研究」の流れ —いくつかのキーワードを中心に—

- (1) 「対照研究」はどのような目的で始まり、どのような流れを経てきたか
- (2) 国立国語研究所におけるこれまでの対照研究の系譜と今後の展開

#### 1.1. 言語研究における「比較」と「対照」

##### 1.1.1. 比較言語学

現代の学問としての対照研究を考えるには、18世紀末に始まり19世紀に多くの業績を生みだした「比較言語学」との対比で始めるのが妥当と思われる。

表1 比較言語学と対照言語学

	比較言語学	対照言語学
対象言語の関係	共通の起源（祖語）があるとされる言語を選ぶ	祖語は考慮せず、同時期の比べたい言語を自由に選ぶ
具体例	インド・ヨーロッパ語族 ドラヴィダ諸語など	現代日本語と現代英語 現代日本語と現代タミル語など
研究方法	語彙レベルの項目比較を重視	体系的に音声・語彙・文法レベルを比べることを重視
主たる関心	言語の通時的変化 祖語の再構築 言語分類など	言語教育（困難点・誤用の予測） 言語間の体系の差異の記述 言語理論構築の実証例

##### 1.1.2. 「比較」

共通の祖語を持たない共時的な2言語を比べる研究の場合にも、「比較」という語が用いられる例は少なくない。祖語の有無とは関係なく、すべての人間言語に共通する部分は多く、言語の個別性というものは比較・分類され得るものであるとする考え。

\*日英語間の比較対照を扱った代表的出版物から

##### (1) 「対照」を使用するもの

国広 哲弥『構造的意味論 —日英両語対照研究』/ジャクソン K.『日英語の対照研究 —英語中間副詞と日本語相当詞—』/井上 和子『日英対照 日本語の文法規則』/寺村秀夫ほか（編）『講座日本語学10（～12） 外国語との対照 I（～Ⅲ）』/安藤 貞夫

『英語の論理・日本語の論理 ー対照言語学的研究ー』/柴谷 方良ほか(編)『日英語対照研究シリーズ1(～5)』

その他、日英語の対照というわけではないが、次の題名もある。

ディピエトロ R. (著)『言語の対照研究』

(2)「比較」を使用するもの

クライニアンズ E.『日英両語の比較と英語教育』/榎垣 実『バラとさくら ー日英比較語学入門ー』/小泉 保ほか『日英両語の比較研究・実践記録 英語教育シリーズ別冊』/太田 朗ほか『現代英語教育講座 第7巻 日英語の比較』/大江 三郎『日英語の比較研究 ー主観性をめぐってー』/榎垣 実『日英比較表現論』/國廣 哲彌ほか『現代の英語教育 8 日英語の比較』/影山 太郎『日英比較語彙の構造』/國廣 哲彌(編)『日英語比較講座 全5巻』/水谷 信子『日英比較 話しことばの文法』/中右 実(編)『日英語比較選書 1～』

ー「比較」という術語は古くから使われ、言語研究の分野が分化するにつれて、いっそう多面的な意味を担うあいまいな語になっており、対照分析の場合の作業をも指すことが多いから、注意する必要がある。それに対して、「対照」という術語は比較的新しく、対照分析における二言語の比較以外の意味では、ほとんど使われることがない。したがって、本稿ではできるだけ、「対照」のほうを使い、まぎらわしさを避けることにしよう。ー(田中 1979.2:59)

## 1.2. 第二言語教育と対照研究

### 1.2.1. 構造言語学

\*1940年代ーアメリカ構造言語学

Fries, Charles C. (1945)ー音声・文法構造、語彙・文脈(社会環境・文化など)の対照  
Lado, Robert (1957)ー文字体系の対照も含めて、言語および文化の組織的対照  
対照分析ー学習者の母語と対象言語とを、同じ分析法によって記述、体系的に対照。

学習者の困難点を事前に予想、母語の干渉による誤用を事前に防ぐ

ー実際教授の際には、2国語の音体系の比較だけからは予測できないいろいろの外部的要因が混入して来る。たとえば、文字の影響、日本語になった英語の発音の影響、個々の教師が与えるモデル、教え方など(後略)ー(太田 1965:3-4)

\*誤用ー不十分な習得段階であるためのものや、対象としている言語の構造上の複雑さに起因するものが目につく→対照分析への過剰な期待に対する反省

### 1.2.2. 中間言語研究

ーInformation に不定冠詞を付けたたり、hazardの代わりにdangerを用いたり、rescueの代わりにhelpを用いたりするのは、きちんと教えを受けていないからではないか。正しく教えることをしないで母国語の干渉を引き合いに出すのは、教授者の側における怠慢であろう。(中略)『未熟な習得』や『未熟な教授』を『母国語の干渉』という一見科学的な用語で覆い隠すことがあってはならないー(安井 1981.12:29)

\*Selinker—学習者が目標言語を習得していく途中の段階で形成する言語には、かなり安定した体系性が見いだされる→中間言語

### 1.2.3. 第二言語習得

第二言語習得の成否—ニーズ、学習環境、学習支援システム、学習者の年齢、教授法と学習スタイル・教育観との差異、言語学習適性、情意因子など。

\*中間言語や情意分析などの出現によって、対照研究が第二言語教育に果たす役割はなくなっただけか？→学習者の言語習得上の心理的要因までも含めた言語の対照研究が必要。対照研究は対象とする範囲を広げることがあっても、その存在意義を失うことはない。

## 1.3. 言語の普遍性と対照研究

### 1.3.1. 言語理論の変化

1960年代からの言語の普遍的な性質の解明を目指す生成変形文法、その後ハリデイの体系文法、久野の機能文法、フィルモアの格文法等、様々な言語理論が展開される。—英語圏において開発された言語理論は自然と英語を中心に発達するが、その普遍的妥当性の検証において、異なった類型特徴を持つ日本語は格好の資料を提供してきた。また、同時に日本人研究者にとっては、高度なレベルの言語知識、言語直感を要求する現在の言語理論の研究においては、日本語こそが最強の武器となるのである。したがって、日本人研究者による言語理論の研究は、その実践において必然的に日・英語の対照研究に従事することになる。—(柴谷ほか 1992:v)

### 1.3.2 言語類型論

言語間の類似・共通性に注目して言語を分類・整理し、タイプを見いだす姿勢をとる。

- (1) データを広く偏らず集めること、データベースの重要性を強調
- (2) 抽象化を最小限に押さえること
- (3) 言語的普遍性の根拠を、人間の生得的特性だけに求めず、機能的な要因なども考慮すること(コムリー 1992:第1章)

\*データ中心主義の言語類型論←→はじめに仮説をたてる生成文法

\*言語類型論においても、「対照」という研究方法が採られることに変わりはない

\*対照研究は多くの言語研究の根源に位置する

## 1.4. 語用論的研究／認知科学研究と対照研究

\*対照語用論—統語論と意味論中心であった対照研究に語用論分野を取り込む  
Blum-Kulkaほか(1989)のCCSARP(異文化間言語行為具現化プロジェクト)など、同じ言語行為を行うのでも、文化・社会の影響でどのような特徴が現れるかを見る。依頼、謝罪、感謝、誘い、断り、などの言語行為の解明はかなりの成果を生んできた。その他、待遇表現、対人関係調整機能などの解明。

\*認知言語学—言語表現の生成や理解が推論・連想・言語外的知識・脈絡などに基づく心的認知過程とどのようにかかわっているか。語用論研究と文法研究の接点としての役割も期待され、教育の現場からの期待も集める。

\*対照研究—個別言語をつなぐ鍵。言語理論をつなぐ鍵。

## 1.5. 日本語と外国語との対照研究

### 1.5.1. 個別外国語研究の傾向

個別外国語研究—ある外国語に日本人がどういう目的をもって接するのか、それを学ぶのか

—わが国のドイツ語学研究は、戦後、いわゆるドイツ語学概論のかたちで始まった。それは戦前のドイツにおける研究方法の強い影響のもとで、著しく通時論的かつ方言学的であった。(中略)しかし、東西ドイツの言語研究に構造主義的な見方が導入されたのに伴って、わが国のドイツ語学においても共時論的な研究がやがて主流となった。これらの研究はしばしばきわめて専門的なため、言語そのものが自己目的となり、教養も実用ももはやなんの役割も演じていないように見える。(中略)

他方で、ドイツ文学と呼ばれるドイツ語と不可分の学問分野がある。(中略)その基礎作業はもちろん原典翻訳であり、これもまた重要なドイツ語研究である。わが国のドイツ語研究者を網羅する学術団体が日本独文学会という名称を有しているのは、歴史的に翻訳を主とするドイツ語研究がまず先行し、しかも質量ともに狭義のドイツ語学より優勢であったためである。—(木村 1991.11:80)

表2 言語学・語学関係図書目録(1967-1982) (雪嶋 1982.12より)

	書誌	記念論集	総記	語史	語学史	音声学	語彙	文法	文体論	方言・俗語	その他1	その他2	言語別計
ロシア語			9					21				3	33
フランス語			27	7	5	11	11	50				8	119
ドイツ語			36	5		8	13	121	10	5		9	207
英語	2	10	147	56	19	80	49	370	54	23	36 (日英対照)	64	910
中国語	5	2	61			59	18	53		19	44 (漢文)	22 52 (漢字)	335
朝鮮語			27					4		4	6 (系統論)	9	50
アイヌ語			19				21					5	45
分類別計	7	12	326	68	24	158	112	619	64	51	86	172	1,699

限られた文献目録に留まるとしても、なお、そこから読み取れることは多い。

- (1) 言語別の出版量は、英語、中国語、ドイツ語、フランス語の順になっている。
- (2) 全分野にまたがって文献が出版されているのは英語だけで、他は分野別に各言語で特色が見られる。
- (3) 「その他 1」の項に中国語の「その他 2」の漢字関係52文献を加えれば、これらが特に各国語の特色を示す項目だと言えよう。
- (4) 分野別では文法が研究の中心を占め、音声、語彙と続く。社会言語学的視点、語用論的視点はこの分類の限りでは表には出てこない。

#### 1.5.2. 現代日本語研究の隆盛

現代日本語研究は、学問領域として成立

\*国語学の伝統

\*第二言語としての日本語教育の隆盛

(\*当研究所の現代日本語の調査研究)

#### 1.5.3. 多文化・多言語状況の認識と実践

日常生活の中での様々な言語およびその使い手との直接的接触→実社会からの対照研究への働きかけ

## 2. 国立国語研究所における対照研究の系譜

### 2.1. 国立国語研究所日本語教育センター

第一研究室－日本語教育に関する、日本語の音声、文字、語彙及び文法並びに日本人

の言語行動様式に関する調査研究並びにこれに基づく教育内容に関する調査研究

第二研究室－日本語教育に関する、日本語と欧米諸言語（英語・フランス語・スペイン

語・ポルトガル語等）との対照研究及びこれに基づく教育方法に関する調査研究

第三研究室－日本語教育に関する、日本語と東南アジア諸言語（タイ語・インドネシア

語等）との対照研究及びこれに基づく教育方法に関する調査研究

第四研究室－日本語教育に関する、日本語と中国語、朝鮮語等との対照研究及びこれ

に基づく教育方法に関する調査研究

日本語教育指導普及部日本語教育研修室－日本語教育に従事し、又は従事しようとする

者に対する研修に関する調査研究及びこれに基づく研修会等の開催

日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室－日本語教育に関する教材開発に関する

調査研究及びこれに基づく教材の作成・提供、情報資料収集・提供

- 2.2. 上野 田鶴子・正保 勇・田中 望・菱沼 透・日向 茂男（1984.3）「日本語と外国語との照応現象に関する対照研究」『研究報告集 5』pp.199-282（国研報告 79、市販は秀英出版）

#### (1) 研究経緯

日本語教育センターの大半の研究室の室員による共同研究

#### (2) 研究目的とテーマ

照応現象の一端を明らかにする。英語、中国語、インドネシア語、ポルトガル語で、照応現象がどのように具体的に現れるかを報告。

#### (3) 研究資料・研究方法・知見

芥川龍之介『風』とその各言語訳を中心とする書きことば資料を用いる。文内照応、談話内照応の両方を視野に入れ、先行詞の条件、照応詞の条件、先行詞と照応詞との位置関係、先行詞の出現環境といった枠組みを出発点として、日本語と各外国語を個別に対照。

#### (4) 今後の展開

15年近く前に照応現象を広くとらえようとした点、日本語と多言語との対照を試みた点が評価される。その後の照応の研究につながった面もある。今後の展開として、資料の種別・量のいっそうの拡大、特に話しことばを加える、1.3. で触れた言語理論の発展を取り入れ、なおかつ、一貫した枠組みでの分析を取り入れる、教育への応用を視野に入れるなど、多くの可能性を持っている。

### 2.3. 『言語行動における日独比較』 (1984.3) (国研報告80 市販は三省堂)

#### (1) 研究経緯

ドイツ連邦共和国マンハイム市のドイツ語研究所は、1969年頃からドイツ語といくつかの言語との対照研究を始める。1973年の春、ドイツの外務省とドイツ語研究所との企画にもとづいて、独自に日独対照研究が始められる。(金子 1981.12)

1977年に国立国語研究所とドイツ語研究所との間で「日独語の対照言語学的研究に関する協同研究についての合意書」がとりかわされ、当研究所日本語教育センターおよび言語行動研究部の研究員が参加する研究チームが発足した(1984:9)。

#### (2) 研究目的とテーマ

ドイツ語研究所が主として統辞論の対照研究を、国立国語研究所が「基本的な語彙の意味用法に関する対照言語学的研究」と「日独語各話者の言語行動様式に関する対照研究」を分担。(金子 1981.12:68-70)

本報告書は、日本側の2番目の研究課題をまとめたもの—研究テーマは、日本人とドイツ人のそれぞれが実際の言語生活場面で営む言語行動(非言語行動を含む)の実態を記述・対照することにより、両国語話者間の言語行動様式の異同を探求すること。

#### (3) 研究資料・研究方法・知見

ある程度の規模のアンケート調査と観察調査からなる言語行動調査を、1978年から1981年度にかけて日独両国で行った。

最終的に分析対象とした回答数は、ドイツ人323、日本人1,098、在日外国人384。言語生活・言語意識、あいさつ行動、買物・道聞き、身体の空間的な位置・距離に関する知見など、様々な調査結果を得た。

#### (4) 今後の展開

パイロット調査である点を考慮しても、いくつかの反省点が残る。被調査者を機関

ないし個人の関係で得てサンプリングによっていないために性別・年齢別に片寄りが生じたグループもある、在日外国人調査は英語話者のみを分析対象としている、アンケート調査であり面接などを行っていない、ドイツ語版、日本語版、英語版で形式上の不統一が見られるなどの点である(報告書:349)。しかし、それらの限界を踏まえた上で、それまで漠然とした印象論や個人的な体験に留まりがちだった諸点が、まとまった数のデータに裏打ちされた意義は大きいと言える。1.5.3.で触れた事象を取り入れたタイプの研究のはしりと言えようし、その後これに類する調査が出てきている。現在、大規模調査の新プログラム「国際社会における日本語についての総合的研究」で国際センサスが行われているが、上に述べた問題点はかなり解消されている。

## 2.4. 『日独仏西基本語彙対照表』(1986.3) (国研報告88 市販は秀英出版)

### (1)研究経緯

日本語教育センター第一研究室担当。『日本語教育のための基本語彙調査』を受けて行ったもの。

### (2)研究目的とテーマ

日本語、ドイツ語、フランス語、スペイン語で、いわゆる学習基本語彙とされているものについて、意味分類体で一つの表の上に配列し、各基本語彙が、それぞれの意味分野によってどのような分布を示すか、あるいは、分布の違いを見せるかということを見極める。

### (3)研究資料・研究方法・知見

日本語は、国立国語研究所『日本語教育のための基本語彙調査』(市販は秀英出版)より資料を得、他の言語は、いずれも白水社より出版された基本語彙辞典によった。岩崎英二郎・早川東三・子安美知子・平尾浩三・鉄野善資(編)『ドイツ基本語彙辞典』ジョルジュ マトレ(著)野村二郎・滑川明彦(訳・編)『フランス基本語彙辞典』高橋正武・瓜谷良平・宮城昇・エンリケ コントレラス(編)『スペイン基本語彙辞典』

上記の4辞典の各単語に付けられている一義的な日本語訳、あるいは、語釈を項目として採用。日本語から各国語へ、各国語から日本語への両方向から語彙項目一覧を作成。得られた項目について『分類語彙表』に従って意味分類を行う。品詞分類を加える。

『日本語教育のための基本語彙調査』で設定された「基本六千語」、「基本二千語」に対して、各言語の基本語彙がどう対応しているかを示す。

### (4)今後の展開

語彙項目の対照は最初の一步として、多くの示唆を与えてくれると言える。特に、特殊目的を持たない、いわゆる一般向け初級言語教材の場合、含まれた語彙項目の基本度を見ることに貢献できる面がある。延長線上の研究として、各言語による範疇化のあり方の差異も考慮し、また、語彙項目が文脈の中でどのような機能を持つかといった情報を含めるなど、様々な展開が考えられよう。1.3.、1.5.などで触れた研究の進展と連動する展開が今後も望まれる。



## 2.5. 『基礎日本語活用辞典インドネシア語版』(1988.3) (市販なし)

### (1)研究経緯

日本語教育センター指導普及部教材開発室が担当。

日本語教育・日本語研究の専門家による編集委員会(所外委員17名、所内委員・正保勇ほか15名)を設け、その指導のもとに、研究所外の日本語教育関係者に和文原稿を依頼して作成(和文原稿執筆・校閲者24名)。次に、インドネシア語への翻訳専門委員会(所外委員7名、所内委員6名)を設け、研究所外のインドネシア語研究関係者に依頼して翻訳および校閲を行う(翻訳・校閲者17名、校閲者14名)。客員研究員を委嘱し、編集に対して協力を受けた(客員研究員17名)。

### (2)研究目的とテーマ

インドネシア語話者で、中級以上の日本語学習者にあたる者を主たる対象とした辞書の作成。機能語も含めた語彙項目を単位とする。

### (3)研究資料・研究方法・知見

日本語見出し(ローマ字表示・漢字仮名まじり表示)／品詞分類／インドネシア語訳／用例[インドネシア語訳]の形の情報が、4,027語について与えられている。

### (4)今後の展開

日本語・インドネシア語間の辞書が限られているなかで、ローマ字表記・インドネシア語付きの辞書の存在は貴重である。限定された語数ではあるが、かなり詳細な意味記述が与えられており、インドネシア語研究者にとっても有用だという評価を受けている。現在、一般の使用に供するべく市販のための準備が進行している。今後の展開として、収録語彙数や用例数の増加が望ましい。1.2.で触れた言語教育と直結する分野という意味で、様々な言語について多くの成果がこれからも生まれることが期待される。

## 2.6. 『日本語とスペイン語(1)』(1994.3) (市販はくろしお出版)

『日本語とスペイン語(2)』(1997.3) (市販はくろしお出版)

### (1)研究経緯

日本語教育センター第二研究室担当。

研究担当－7名の大学スペイン語学担当の教授を中核とする当研究所客員研究員。

### (2)研究目的とテーマ

大別してふたつの目的のもとに、各研究員の専門を生かす形でテーマを設定している。

(イ)日西対照研究のいくつかの分野における先駆的な研究をまとめ、対照研究を推進すると共に、スペイン語圏の日本語学習者等の教育のために、基礎研究の形で寄与すること。

(ロ)日西対照研究のこれまでの概観をまとめること。

報告書(1)は日西対照研究の全体像の把握に重点を置き、報告書(2)は「言語レベルと結合関係」を統一テーマとしてかかげ、そのもとに各研究員の論文がまとめられている。両報告書とも、第2部に概観が置かれている。

現在は「動詞とその周辺」を統一テーマとして、第3期の研究が進行しつつある。

### (3) 研究資料・研究方法・知見

原則としては、各研究員による個人的な研究を、研究会を重ねる中で統合していく。各研究員の独自性を生かす一人間表示接尾辞、認識動詞構文、トキ・タラ複文、ボイス、引用と話法、文末省略、動詞と格標識など、文法分野の研究が中核となる中で、応用的な研究も収められ、言語研究の幅の広さを反映。

### (4) 今後の展開

日西対照研究はこの10年においては、まだ創成期にあったといってもよい。本研究においても、どちらかと言えばその概観をまとめることに力が注がれてきた。しかし、現在は研究分野としての確立を見たとも言える時期にあり、今後は1.3.の文法理論の発展を取り込んだ基礎研究の充実のもとより、1.2.の教育分野、1.4.の社会言語学的分野の領域での研究の充実も望まれる。

## 2.7. 『日本語とポルトガル語（1）』（1996.12）（市販はくろしお出版）

### (1) 研究経緯

日本語教育センター第二研究室担当。

研究の主力—大学ポルトガル語学担当教授を中心とする4名の客員研究員

### (2) 研究目的とテーマ

現代のブラジル・ポルトガル語と日本語をとりまく状況の一端をとらえること。両言語の接触の歴史、両言語の学習環境と使用実態などを対照することで、日本人に対するポルトガル語教育、ブラジル人をはじめとするポルトガル語話者に対する日本語教育のための基礎資料を提供することを目的とする。

### (3) 研究資料・研究方法・知見

社会言語学的アプローチ。日本語とポルトガル語との言語接触の歴史、日本とブラジルとの関係、在日ブラジル人の日本における言語生活、ブラジルのポルトガル語と日本のポルトガル語との差異、日本の大学におけるポルトガル語教育、ブラジル人の日本語学習環境などについて概要をまとめた。

### (4) 今後の展開

第1期の研究において日本語とポルトガル語を取り巻く言語環境の概要をまとめた。現在は2期目で、大きなテーマとして「ブラジル人と日本人との接触場面」をかかげている。様々な組み合わせのポルトガル語母語話者と日本語母語話者とが、対人的な接触を持った際のコミュニケーションのメカニズムの解明を目指している。そこには両者の社会文化的背景に関する社会学的対照分析も含まれる。当面は、1.2.および1.4.分野でのいっそうの充実を目指す方向で展開されると思われるが、この方向は「共生の時代」を迎えた日本において、今後その重要性を増すと思われる。

## 2.8. 『マイペンライ』（1995.3）（市販はくろしお出版）

日本語教育センター第三研究室が担当している。担当者より報告する。

『日本語と朝鮮語』（上・下）（1997.3）（市販はくろしお出版）

日本語教育センター第四研究室が担当している。担当者より報告する。

## 2.9. 今後の展開にあたって

日本語と外国語との対照研究の今後を考える時、以下の方向性が見えるのではないだろうか。

- (1) 言語資料の質・量の充実
- (2) 動的なプロセスの重視
- (3) 2言語から多言語への広がり
- (4) 応用的・社会言語学的広がり

## 引用文献

- 太田 朗ほか(1965)『現代英語教育講座 第7巻 日英語の比較』研究社  
金子 亨(1981.12)「日独語対照研究の現状」『言語』Vol.10 No.12 大修館書店 pp.68-73  
木村 直司(1991.11)「ドイツ語研究の現状と未来」『言語』Vol.20 No.11 大修館書店 pp.79-84  
コムリー バーナード(著)松本克己・山本秀樹(訳)(1992)『言語普遍性と言語類型論 -統語論と形態論-』ひつじ書房 (Comrie, Bernard (1981,1989) *Language Universals and Linguistic Typology*, Basil Blackwell Ltd.)  
柴谷 方良・西光 義弘・影山 太郎(1992)「シリーズまえがき」三原 健一(著)『日英語対照研究シリーズ1 時制解釈と統語現象』くろしお出版  
田中 春美(1979.2-3)「日英語対照研究の現状(上-下)」『言語』Vol.8 No.2, Vol.8 No.3 大修館書店  
橋元 良明(1992.12)「間接的発話行為方略に関する異言語間比較」『日本語学』Vol.11 No.13 明治書院 pp.92-101  
水野 光晴(1995)『外国語習得 その学び方100の質問』研究社  
安井 稔(1981.12)「対照研究の流れ」『言語』Vol.10 No.12 大修館書店 pp.22-29  
安井 稔(1996)『コンサイス英文法辞典』三省堂  
雪嶋 宏一(編)(1982.12)『言語』Vol.11 No.13 大修館書店 pp.131-213  
Blum-Kulka, S., J. House & G. Kasper(eds.)(1989) *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*, Ablex Publishing Co.  
Fries, C. C. (1945) *Teaching and Learning English as a Foreign Language* (太田朗 訳注(1957) 『外国語としての英語の教授と学習』研究社)  
Krzyszowski T. P. (1989)' Towards a typology of contrastive studies.' *Contrastive pragmatics*, Amsterdam, John Benjamins Co. pp.55-72  
Lado, Robert (1957) *Linguistics Across Cultures* (上田明子 訳注(1959)『文化と言語』大修館書店)  
Oleksy, Wieslaw (ed.)(1989) *Contrastive pragmatics*, Amsterdam, John Benjamins Publishing Co.  
Schumann, J. (1975) 'Affective factors and the problem of age in second language acquisition.' *Language Learning* 25:209-235